

戦争の記憶・平和への祈り

〔戦後70周年平和啓発事業〕

平成27年10月

鹿児島県屋久島町

刊行のことば

先の大戦から70年の月日が経ち、この間、日本は戦争を放棄し、平和国家としての道歩んで参りました。私たちは平和を享受して参りましたが、一方で戦争の悲惨な記憶は風化しつつあります。再び過ちを繰り返さないためにも、今、生きている私たちが平和を守り、育て、語り継いでいかなければなりません。

顧みると、各集落を襲った空襲や機銃掃射の被害、そして終戦間際から戦後にかけての厳しい食糧難がもたらした凄惨な現実がありました。

現在の平和と繁栄が、戦争によって命を落とされた方々の尊い犠牲と、戦後の町民の皆様の多大な努力の上に築かれていたことを決して忘れてはなりません。屋久島町は、平成21年7月「非核平和宣言」を行い、改めて戦争のない恒久平和を実現することを町民の悲願として宣言いたしました。

戦争の悲惨な実態やその教訓を風化させることなく、平和の尊さや命の大切さを次世代に語り継いでいくことが、今を生きる私たちの使命であり、未来を担う若い世代をはじめとする多くの皆様に、改めて戦争と平和について考え

ていただく機会となるよう、ここに戦争体験者の方々への体験談と子どもたちによる平和への思いを編さんいたしました。戦時中を生きた方々は齢70歳を越え、その凄惨な体験談や、往時の生活の様子など綴られた言葉の一つひとつに、人々の生き様や、今に繋がるかけがえのない島の歴史が息づいています。そして、若い世代もまた、そういった声に触れ、平和への思いを強くしていきます。

本書の編さんに際し、取材にご協力また、ご寄稿いただきました皆様、そして町内の中学校と屋久島高等学校関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

ここに戦後70年を経て、戦没者の方々へ深い哀悼の念をささげますとともに、その惨禍が2度と繰り返されることのないよう、そして厳しくも荒々しい太古の自然に彩られた、この平和な屋久島町を、未来を担う若い世代の皆様と共に永久に引き継いでいけるよう祈念いたしまして刊行の言葉とさせていただきます。

平成27年(2015年)10月

屋久島町長 荒木 耕治

【目次】

刊行のことば

戦争体験記 (敬称略)

【取材の部】

田代 小夜子	1
石田尾 道義	4
松田 保	7
齋藤 辰徳	11
小瀬田老人クラブ	16
山田 ツル	20
日高 亨	24
羽生 チトミ	26
羽生 津南男	28

【寄稿の部】

「学徒出陣と私」 林 益人	30
「空襲と私」 池亀 一海	34

【学生の部】

「平和に向けて」 中央中学校	眞邊 和花	37
「平和とは」 金岳中学校	山口かの子	38
「平和とは」 安房中学校	菊池 柁陽	39
「いつかなくなるまで」		
岳南中学校	山下 麻綺	40
「戦後70年の今、訴えること」		
屋久島高校	日高真奈美	41

「非核平和宣言」

用語解説

あとがき

屋久島エレジー

戰爭體驗記

【取材の部】

戦争が始まる頃、ちょうど私は18歳くらいでした。

実家は農業も手広くやっていましたが、運搬船を所有していました。お客さんを十数名乗せて屋久島から炭や薪を積んで鹿兒島に渡っていました。家の仕事を手伝ってくれる人が皆、召集でいなくなり、私もちょうど学校が終わった頃です、皆兄弟は上の学校に進んだのですが、その頃父が「小夜子、一年我慢してくれ。来年になったら鹿兒島の裁縫の学校に出してやるから」と言ってくれ、家の手伝いをする事になったのです。

鹿兒島に船を出すときは、店まわりで注文をとるのです。

鹿兒島や長崎でも店をまわって、帰りに品物を積んで帰ってくるのです。戦争当時でも、めずらしいお菓子なんかは豊富にありました。

その後、船が軍のほうに揚子江で荷物運搬をするために

*徴発されたのです。船乗りも全員行くことになりましたが、私は屋久島にいました。船の徴発時には盛大に見送りをして、それはそれですごかったです。日本も景気のいい時でした。

*ノモンハン事件ってあったでしょう。その後に、鹿兒島のお婆の旦那さんが45連隊で、ノモンハン事件の終わった後

の整理に行くことになっていたので、それに家族も同伴できたのです。その際、私もついていくことになりました。ハイルというところまでね。

兄が、ハルピンの満鉄病院で医者として働いていたので、私もそこを通って行つたのです。その頃、まだ日本の景気のいい時で、ハイルは兵舎を作つたりしていました。見渡す限り平地で、朝も3時、4時から夜が明けるようなところでした。

兄は、大出校を出ていたから、普通20歳で受ける*徴兵検査を延期していましたが、*召集令状が来て朝鮮で入隊したのです。私は、その後屋久島に帰ることになり、親と住んでいました。

一湊、安房は*焼夷弾が落ちて焼けたのよね。宮之浦に落ちたのは爆弾だったからね。爆弾が落ちた時は、天井板を外して疎開小屋をつくり、家の中の家財道具は全部運んでいた。家の中は空っぽだったのですよ。私たち女子青年団は、空襲があつてから早朝みんな並んで、軍歌を唄いながら、武運長久を祈って益救神社にお参りにいくものでした。

若い女子青年団は、蚕を作る先生に習って、鉄かぶとの内側に入れる真綿を作つたりしたものでした。慰問袋に入れて、戦地の知り合いに送るのです。その頃は、満州に届けていたのですよ。慰問袋の中身は真綿や*千人針でした。

ある日、いとこ3人で現在の田代別館前の畑で、朝早く芋の草取りの加勢をしていました。その時、空襲警報が鳴り、いとこの1人が「空襲警報が鳴ったから帰ろう」というのに、私が「大丈夫、大丈夫」と言っていたら、先の山の方からB29が3機ずつ6機並んで飛んできて、火の玉が見えたのです。それから3人、田代別館そばの川の土手に急いで隠れました。機銃がパラパラと落ちて、一瞬にして村の方は黒煙に覆われていて、恐怖で泣き叫びました。もう橋も壊れ、家には帰れないと思い落胆しているところに、知り合いのおじさんが偶然、船で通りかかってくれて、いとこ2人を向こう岸に渡してもらったのです。

私の家の疎開小屋は、今のAコープ辺りにあったので帰って行くと、いとこのお母さんも、もう私たちがダメだと思いつ込み、げっそりなっていました。私の父も相当心配していました。それが、一番記憶に残っていることです。

他にも記憶にあるといえば、朝早く畑仕事をして、昼間は疎開小屋に隠れる生活を続けていたのですが、ある日、疎開小屋に行く途中、日の出橋のところの路上にたくさんの方が寝転がっているのです。聞いてみると、昨夜、永田地区で艦砲射撃に遭い、夜中一晩中歩いて逃げてきたそうです。爆弾で亡くなった人も何人かいました。家畜も村で飼っていましたが、爆風でやられた死んだ豚が疎開小屋に配られたけれ

ど、食べられるものではなかったですよ。

種子島に漁船で食糧を買いに行つて、たくさん荷物を積んだ帰りに海の上でやられて、亡くなった方もいました。戦中は食べるものもあつたけれど、終戦後は、食糧難で食べ物がなかつたですね。おじいさんが、デンペン飯を山に運ぶ途中、雨上がりで足元がすべった拍子にデンペン飯を落としたそう。「その勿体ないことと言ったら！」と、悔しがっていました。私は、その言葉が忘れられなくて、本当に食糧難だったのでしょうか。今では考えられないことです。

終戦後は、復員し帰つて来た人たちは、生きて帰つてきたということでも風当りも強かった。今こそ付き合つてはいるけれど、当時は、食うために一生懸命働かないといけないし、同級生と会うこととか、滅多に付き合うことがなかった。遊ぶ暇などないのです。私たちは、空港作りに種子島の増田にも行つたのですよ。

兄も戦死しましたからね。*ビルマのどこかで眠っていると思うと、今でも涙が溢れます。悲しいです。

あの頃、学校に出すのも親は大変だったと思いますよ。兄が、いつ帰つても開業できるようにと、父は土地を買い、無事を祈りながら待っていたのですけれど、戦死してしまい無念でなりません。親も人前で泣くことも許されない時代です

から、親の気持ちを考えるとやりきれません。もう、戦争なんて聞きたくもありません。大きな声で泣くと叱られる時代ですから。

今、歳を重ねてみると、母は、兄の戦死をどこで泣いていたのだらうと、親になつてみて、あの頃の母の気持ちが痛いほどわかります。納戸で、うなだれていた母の姿が忘れられません。私が憶えているのはそのぐらいです……

2度と戦争なんか聞きたくもない。

戦争とは、怖いものだということを理解してもらって、平和な世の中であってほしいものです。

石田尾 道義 (90歳) 宮之浦在住

「・・・海行かば 水漬く屍

山行かば 草生す屍・・・」

元氣を出そう、と顔の火傷の痛みを堪えつつ、同僚と2人で口ずさんでいた。

巨大な鉄船の沈没に巻き込まれぬよう、それからはできるだけ離れ、目立つ漂流物に大人数で付いていると機銃掃射の標的になってしまう。だから小さな角材を掴み、重油の厚く浮いた海面を漂っていた。

すると波間の彼方に立ち上がる大きな水飛沫が覗く。あの、巨大というにも巨大であった、日本帝国海軍の誇る旗艦、戦艦大和の最後の姿であった。

大正14年、宮之浦に生まれる。

6つの時に父が他界、以後女手一つで育てられることになる。

宮之浦川に橋が掛かり、小学校が現公民館の辺りから川向かいに移ったその年に小学校に入学。尋常小学校6年、高等科で2年学んだ後、営林署が宮之浦川上流に開設していた職業修練所に入所、2年間学んだ後、憧れだった海軍に志願した。

入団試験に合格し、相浦海兵団に入団、3カ月後、佐世保

海兵団に移動。程無いある日の朝礼において、まだ新造船であった軽巡洋艦「矢矧」への配属が発表された。

昭和18年の暮れ、これは最高に栄誉あることであった。

「矢矧」内では機関課内・電気部への配属。艦載の水上飛行機を吊り上げるグレン(クレーン)の操作、碇を上げたり、電球の交換まで電気にまつわる一切のことを担当した。

巡礼当番もあったので、その黄色と赤の腕章をしていれば艦長室であれ館内至る所に入ることが許された。

そしてシンガポールにおける訓練、レイテ沖海戦等を経て、帰還してきた佐世保に停泊中の甲板上において、700名を超える乗組員とともに、艦長から「沖繩特攻」の言葉を告げられる。

昭和20年4月7日、その日は中甲板における電話番号をやっていた。

「パカパカパツパツパツ」

ラツパの音が戦闘配置を告げ、そのまま昼飯の椀が運ばれてきた頃に、敵雷撃機からの魚雷が船尾を捉えた。いつしか通気パイプを伝って部屋が煙で満たされ、熱風が顔を焼き、「総員退避」の命令で上甲板に飛び出した。遥か下方に、紺碧であるべき海面は甲板わずか1m程下にまで迫った重油の海となり、とにかくそこに飛び込んだ

夕方、味方の駆逐艦にロープで吊り上げ救助され、くたたりとへたり込むと顔をバンバン叩かれた。「元氣を出せ」と。

そして佐世保に帰港。終戦・除隊となり屋久島へと帰途に就く。鹿児島湾外はGHQによる航行禁止が解除されていなかったのだが、一湊から来た漁船に乗せてもらい何とか一湊へ。宮之浦までは歩いて帰った。

爆撃により家は基礎石を残してなくなっていたが、山の中の疎開小屋で家族に再会できた。

丁度十五夜の頃だった。

「その時、自分が死ぬとは思わなかったですか？」

お話の途中、何度か聞いた。

「死ぬとか生きるとか、そんなことは何も考えなかったからねえ。」

ひたむきな人とは、えてしてそういうものなのかもしれない。

平成5年、消防団をなんと40年勤め上げた功を称え、勲6等単光旭日章を授与される。

朗らかな奥さんと2人、帰島後再建した家で、今も元気に日々を過ごしている。

文・神崎 真貴雄

平成25年10月20日発行

「屋久島ヒトメクリ」12号」掲載

終戦から70年。90歳になった道義さん。

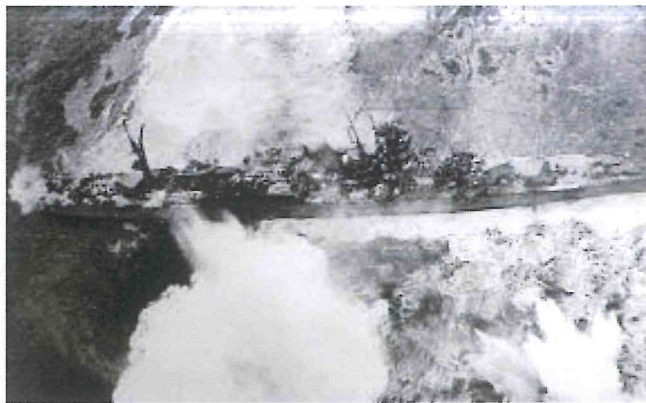
今回の取材では、当時の話を聞いても、耳が遠いこともあり詳しく話を聞くことができなかった。

「マツカーサーが偉かった。天皇制を廃止しなかったから、よかったのだと思う。どこで暴動が起きるかわからなかった。」と、何度も繰り返しておられた。

そして、ただ、「矢矧」が沈没した後、海を漂いながら、護衛していた「大和」の沈没していく、最後の姿が忘れられないと、言われた。

あの時は、生と死が紙一重だったと。

※2年前に、神崎真貴雄氏が取材をし、「屋久島ヒトメクリ」12号」に掲載されたものを、了承を得て転載した。ありがとうございます。



軽巡洋艦 矢矧



石田尾 道義 17歳

兄は昭和16年頃、*旧制中学(今の高等学校)を卒業して、関東電気(今の東京電機)に2年間勤めてから、兵隊に志願するということで屋久島に帰ってきて、*青年学校の先生をしました。兄は秀才で、その頃は、皆招集されて先生がいないうので「どうしても先生をしてもらわんと困る」と頼まれて、青年学校で一般教育と軍事教育の先生を2年間して、その後昭和18年に入隊し、戦死しました。

私はね、尋常高等小学校(今の中学校)2年生で卒業だから、卒業したのが昭和18年3月31日。昔は鉄工所がほとんど北九州にあったから、皆を集めて飛行機を造らせていた。うちの親戚はほとんど小倉にいたから、私も就職で小倉の方の軍事工場のようなところへ行きながら夜間高校でも出たかと思っていたのだけど、戦争の最中になってしまったものだから、行くことは出来なかった。

そうしたら、今で言う総務課長が、「どうしても役場にきてもらわなきゃ職員が足らんよ。」ということだね。昔は、村長は民政で登用じゃなくて、地元から推薦して国が決めるわけですよ。相応しい人がいると地元から申請するわけね。私

が高等小学校を卒業した時に、その時の村長さんが、一湊の真辺誠二さん。役場は今の旧ホテル縄文辺りにあった。そして、村長の家が今の宮之浦石油店があるところ、私の家の隣だった。

私は役場について、兵事係をしていた。役場は、総務係2人、財政会計係が2人、それから税務係、経済係、それに戸籍係、教育係、ほとんど2人ずつ、それに兵事係。私はその中の1人。国から召集があれば*「赤紙」を持って、各家に必ず夕方行っていた。皆、昼間は農作業か漁に行っているから、ほとんど留守でしょ。それで、必ず2人で行きなさいと言われていた。係には、安楽さんと、私のおじさんにあたる川崎春武さんという、私より10歳ほど上の人が2人いて、川崎さんは小瀬田まで、安楽さんは永田まで行き、私は、2人に付いて行っていた。夕方出発で、電話もない車もない時代だから歩いて行って、たまに晩飯をご馳走になることもあった。

前年に徴兵検査があつて、それで、翌年度、鹿児島島の45連隊の本部から召集が言ってくる。その順番を決めて、甲種1、甲種2、甲種3とあるから、甲種合格は即入隊。乙種は兵隊が不足した時に呼び出しがある。丙種は、三ヶ月間教育を受ける、というもの。私は、それを貰うちようどギリギリの年代だった。兵事係の主任が名簿を見て名前を書く。一湊に1人、永田に1人、宮之浦に1人、小瀬田に1人というふうな。そうして、令状を夕方に係2人で持って行く。再度召集

される人もいるし、新しく兵隊に行く人もいる。言つて良いかどうかと思うけど、召集令状が来ても、逃げた人もいる。本土には憲兵隊がおつて、それは、徹底的に調べる。

戦争には行かなかつたけど、宮之浦でも空襲があつた。

昭和20年の3月に役場を辞めさせてくれとお願ひした。私にはその時、8人子どもがいて、うち男2人だつた。先に話した長男は昭和18年に召集。宮之浦の青年学校の先生を辞めて入隊。それで、私は家事のことをしなければ、ということ、役場を辞めさせてもらつた。そうしたら、4月8日、宮之浦が大きな空襲を受けた。家は、そんなに焼けなかつたけれど、宮之浦の古い橋は、爆弾でやられた。

宮之浦の益救神社は全部山(杜)だつた。その空襲の日は、8番目の兄弟の小学1年の入学式があつて、式を学校などですると大変だから、神社の山の中でしていた。父も母も入学式に行つていて、爺さんが漁師だつたこともあり、私は、5月に始まるトビウオ漁の網を作る作業をしていた。トビウオは今ももう、沖合で産卵するようになっていて、当時は5月から6月、屋久島の海岸に産卵に来ていたので、私は4月にその網を作るため、益救神社の杜の1番向こう側の恵比寿神社の辺りで作業をしていた。恵比寿様とは海の神様でしょ、その神様が山(杜)の中に小さな祠になつていたの。そ

こで、空襲に遭つた。この体に残る傷跡を見てください(そう言つて、体に残る傷を見せて下さつた)。もうあまり分らんけどね。こことここが引つ付いた。ここにもあるでしょ傷が、ここにも。それから、肩の所にも傷があるのだけど、爆弾の破片が飛んできたの。ちようどそこに神社が管理していた大きな神木があつて、漁業者は、普段その神木に交代でお神酒をあげたりお茶をあげたりしていたので、そこで、爺さんたちとトビウオ漁のための網を修理していた。

ちようどその時、空襲があり、神木を囲むように隠れた。もう1人いところがおつただけだね。その人も、たまたま私の海側について、戦闘機が川沿いにずうっと私の方を通つて来て、その時の空襲で私たちは怪我をした。他にも怪我をした人が、おつたかもしれん。3人治療してもらつて、2人は死んだ。それで、神社での小学校の入学式に参列していた生徒さん達、先生方は大騒動していた。父は、私たちが網の修理をしているからと入学式を途中で抜け出して、私たちのとこに来よつたら、戦闘機が「ヴー」と来たから、途中の山の神社の中に危機一髪入れたので怪我もなかつた。

私の肩には、今でもありますけど、以前、栗生の診療所で町の結核検診の時に、藤村先生がレントゲンを見て「兄さん、これは、何か黒いものが入っている」と、聞いてきたことがあつた。今でもその時の爆弾の破片が肩に入っている。

役場の中に警備隊というのがあって、隊長は、永田の藤原カズオという人。随時3名が役場の脇で勤務していた。そこに親戚の青年がいて19歳だった。20歳が徴兵検査だったんだけど繰り上げになって、19歳から兵役の命令を受けた。そして、その人も講習を受けた後、即その年に兵役に行った。そのいとこが、広島陸軍に入隊になったのは、原爆の時。朝の点呼や体操をして、一時間休憩ということでしたら、ちようど8時半前じゃないかな、原爆が落ちたのは。その人は、たまたま助かったわけ。良かったけれども、肝臓が悪かったようで、あまり長生きはせずに、帰って来てから50歳くらいで亡くなった。

私が役場を辞めて3ヶ月程してから、警備隊だった私のおじさんが辞めたから、「ちようど、あなたは走って回るには、いろいろ上屋久のことを分かっているから、警備隊に入ってくれ」と、言われた。嫌と言えない時代だった。

6月に「一湊の浜に、30体くらい遺体を並べている」と、警備隊の矢野さんから、私にすぐ連絡があつてね。それは、満州兵だと聞いた。兄貴も満州兵で行っているものだからビツクリしてね。車も無いけど一湊にすぐ走ろうということになった。一人ひとりネームは書いてあり、銃剣も下げたまま、足が抜けている人もいた。

一湊の警備隊からの連絡で、この24、25体の遺体をどう

するか、という話になった。宮之浦も海岸で焼いていた頃で、火葬場も無いわけ。あまり屋久島には関係ないような感じのご遺体だったから、とにかく本土で1番近いのは枕崎なので、枕崎の警備隊と連絡を取りあつて、枕崎のお寺で供養をお願いしよう、という話になった。そしてサバ船の人に枕崎まで乗せて行ってもらったのよね。

そうして、終戦を迎えたわけです。

宮之浦の空襲の前に一湊、永田、小瀬田でも空襲があつた。永田では艦砲射撃もあつたと聞く。栗生もあつたらしい。昭和18年くらいになるのかな、B29が、「ゴーゴー」いつて宮之浦の上なのか一湊の上なのかわからんけど、旋回して。その頃には、屋久島全島が山に疎開していたから。家は、1回機銃射撃を受けたようだけど、そのことはあまり記憶にない。町には、あまり爆弾は当たっていない。海岸付近の家は、みんな機銃の跡や破片の跡が柱にあるのよ。村の中には人はいなかったから良かった。

帰ってきた兄貴も、絶対、戦争の話はしなかった。

16歳から志願ができたから。海軍志願も宮之浦で5名ほど受けたが、若い人たちが戦死している。

年齢が上の人は、戦争に行っても帰って来ていた。そして

再度、召集されていた。

若者が戦地に送られていた。本当に若い人の命が奪われている。

屋久島でも、いい人材をたくさん亡くしている。

若い魂は有効に使わないといけない、と思うのよ。

尊い命を奪った戦争は、2度としちゃあいかん……………

小学6年生から西之表の旧制中学校に通い、戦争で負けて種子島から帰ってきたのが、今の中学3年生の時だった。自分が行った旧制(種子島)中学校の高等教育というのは、当時は種子島か、鹿児島。今で言う鹿実とか鹿商とか、鶴丸とか甲南とかあったのだけど、それは相当頭がよくないと入れない。頭のいい人もいたけど、皆、貧乏だったから戦後、生活が安定しないうちは勉強したくても行けなくて、我慢しようということになる。

父は大工で、お袋が種子島の人で、とても教育熱心な人だった。それでも、お金が無くて下宿はできず、5年生で小学校を卒業して6年生で種子島の旧制中学の寄宿舎行き。泣きたいような気持ちだった。他にも何人かは、屋久島から行った人もいたが、もう生きているのは自分くらい。西之表に行つて、きばつて勉強しないと、男ばかり兄弟3人の長男なので面倒みないとならんからと。おふくろは、「あなたは勉強が好きなのだから、勉強して、がんばって学校に行きなさい」と。しかし、家も貧乏だったので行けるのだろうか、思っていた。

当時は、食べ物も自分たちで作ったイモか、ラッキョウの塩付けかトビウオか。ほかは何も無くて、トビウオだけは大量だった。一夜干しを引き裂いて、それをしゃぶりながら背負子を持って仕事に行つた。そういう時代だった。そんな時だったが、おふくろは、旧制中学校へ「頑張つて行ってきなさい」と言つて、たくさんあった綿と、母の嫁入り道具の帯を解いて作つた、布団とリュックサックを作つて持たせてくれた。皆、一生懸命になつて勉強した。食べるものが無く、親父は大工さんだったから、お腹が空いたから仕事をせんとというわけにもいかない。弟たちも小さく、一度は母に、「10円あるからビスケットを買つてきなさい」と言われ、ビスケットを7枚買って来て、1枚食べちゃあ水を飲み、1枚食べちゃあ水を飲みして、何とか腹を満たしたこともあった。そういうのは一生忘れん。あの時おふくろは、自分が食べないで、子どもと親父に食べ物をやつて、ご飯食べてないよ。

そんな中、自分は種子島に行くことになり、見送りの時、母は船が見えている間中ずつと手を振り続けていた。島間港への船旅は2時間かかった。寄宿舎では、1年から5年

までが、六畳一間に多いところは7、8人で生活した。朝起きると、まず掃除。はじめは、何も知らず掃除でほうきを使って「ほうきを使っているのは3年生からだ！」と怒られた。叩かれることは日常的で、もう慣れてしまったけれど、きつかった。その代わり、身の回りのことなど、しっかりと叩き込まれるので、寄宿舎に入っていない者たちが、多く学校を辞めていくのに、寄宿舎組はへこたれなかった。そのおかげで、根性が付いた。今では寄宿舎のおかげだと思っている。掃除が終わると、号令調整。「頭、中!!」「左向け、左!!」と、訓練で声がかかるまで叫ばされる。1日の授業と訓練が終わって帰ってきたら、また掃除、疲れで体がまともに動かなくても、やらされた。

飛行機が来たら、早く逃げないと撃ち殺されると思った。竹山があつて、そこに逃げ込むんだけど、*グラマン戦闘機がどンドン機銃を撃つわけ。「キンキン、キンキン」竹に当たる音で生きた心地がしなかった。とにかく必死で隠れて「頭隠して尻隠さず」とはこの時のことだった。

入学して2年目、榕城小学校に行くことがあった。すると皆校庭に正座して泣いているので「何をしているのか」

と言うと、「戦争に負けた」と言う。「えー!? 本当に負けたとか?」と聴くと、「今、天皇陛下がラジオで言いよる」と。そのラジオを聴いていたら具合が悪くなってきた。それまで、飯も食うやら食わぬやらで、それでも勉強して、幼年学校に入るために一生懸命だった。幼年学校を卒業し陸軍士官学校に入学すれば、将来は将校になれるという、その一心だった。

試験をしている最中に空襲に遭ったりもした。今でもちやんと覚えているのが、荷車をひいているとき、田んぼの中に豚がもがいていて、それを助けようとしたら空襲が来て、機銃が降ってくる中、荷車を引いて逃げた。

戦争に負けたと聞いてから、自分は人間がコロツと変わった。「えーい、勉強もしなくていい。どうにでもなれ!」と言って、喧嘩もした。叩いたり叩かれたり。それまでは、勉強も頑張ってきたが、周囲にあたりちらしていた。

全校450人の内、50、60人くらい幼年学校の試験を受け、自分は通っていた。それで、明日から特別に勉強をするから、ということ、学校は無くなったので、公民館を借りて、画版にひもを付けて、鉛筆もあるだけ持って行って勉強していた。そこまでしてやっても、戦争に負けた

となると憤り、どうにかなつてしまふ。今思うと、その寄
宿舎生活のおかげで今があるとは思うのだけどね。

それから、屋久島に帰らなければならない、ということ
になった。安納出身の鎌田先生という、とても丁寧に教え
てくれる先生がいて、地元なので実家に帰れるのに、残つ
て面倒を見てくれた。昔の農業の専門学校と一緒に行って、
荷車を借りて芋を買って来たりもした。お金はみんな屋久
島から持つてきているから有ったが、店があつて何か売つ
ているというわけではないので使い道がない。買いに行く
と、寄宿舎の生徒で、かわいそうだということで、普通な
ら売つてもらえない食料を分けてもらつたりもした。

鎌田先生が、「今夜、8時に来なさい。島間に行こう、
君は足腰が強いから」と言われた。島間がどこかもわから
なかつたが、先生が14里くらい(約55km)だと言い、「お
前たちは、ここに居たつて屋久島には帰れない。島間に行
けば、そこから屋久島は近いから、屋久島の船があるは
ずだ」と。そうして、島間に向けて歩いてみると、「止ま
れ、どこに行くのか!」と、もう戦争も終わっているのに
衛兵がいた。事情を説明すると通してもらえた。休憩しな

がら夜明けの4時過ぎくらいに着いた。そこで港のおばさ
んに話を聞くと、屋久島行の新福丸が、今朝出たところだ
と、「西之表に居ても船は行かない」と言われ、休憩をし
て、また西之表へ、皆に伝えに帰ろうということで、2人
横になった。5時間ほど寝て、朝露で顔がびっしりぬれ
ているので目が覚めた。長旅で足が真つ白になっていたが、
靴を履き直し、西之表まで歩かなきゃと言うことで、4、
5キロメートルも歩いたか、ちようどトラックが通りかか
つたので、それを止めて事情を話し、浜椿まで乗せてもら
うことができた。降りた時は、何度もお礼を言った。それ
から十六番地(疎開している山中)へ帰った。トラックの
おじさんが心配してくれたが、「ここまでくれば、もうあ
と少しだから」と、先生と2人で歩いて行つた。今でも、
あのトラックの人は生きているだろうかと思うほど、あり
がたかつた。

疎開の場所について、まずは食事をとり、その夕方、屋
久島出身の80数人を集めて、鎌田先生が島間港行きの説
明をした。「がんばったな」と、声をかけられた。それか
ら「翌日には行こう」と言うことになり、「斉藤、案内せ
んと、道が分からんから」と言われ、また歩くのかと、思

ったものだった。

島間に着くと皆で炊き出しをし、公民館に1週間くらいいたのだろうか、もう食べ物が無くなるという頃、トビウオが大漁となり、それを分けてもらい食いつないだ。お金を払うと、波止場の人たちは、現金でもらえることに喜んでいた。明日は何を食べたらいいかと考えていたら、明朝、新福丸が屋久島に行くと聞き、皆大喜びした。

新福丸は客船ではなく、結構大きな昔のサバ釣り船だった。船に乗ると、万歳を繰り返した。皆喜んで、船から島間港へ向けて何度も手を振った。屋久島に行きさえすれば、どうにかなると思っていた。

安房港に入ると、さらに大喜びだった。安房で皆と別れ、気がつくと上屋久側へ行くものは自分ひとり、その船に乗った旧制中学生は、自分以外はすべて旧屋久町の人だった。

平内の「島いところ」の人が自分を探しているので「郵便局へ行きなさい」と言われた。聞けば、母が3日間、自分が帰って来ないかと迎えに来ていたが、先日とうとう諦めて帰ってしまった、とのこと。偶然、郵便局で居合わせたおじさんと2人、上屋久方面に向かうことになり、「島い

ところ」のおじさんにももらったおにぎりを、2人分けながら帰った。

朝、船が安房港についてから、楠川の家に着いたのは昼頃だったと思う。おじさんは、宮之浦だということ、おにぎりの札を言って、帰って行った。

我が家を見してみると、家に竹を突っ込んで、住んでいる様子が無い。これはどうしたのかと思っていたが、後で聞くと、空襲でやられないよう偽装し、家族は疎開していたのだそうだ。人も犬もいないが、どうなっているのかと尋ねていたら、顔見知りのおじさんがいて、川沿いの畑の疎開先を教えてくださいました。話を聞くと、おじさんは足が悪いので、ここに残っていて、食べ物子どもたちが持つてきてくれるとのこと。それから、疎開先の畑に行くと、母が抱きついて喜んでくれた。

それからが大変。とにかく食べ物はずしかなかった。中学校の園山という陸軍中尉の先生には、「戦争には負けしたが、お前は、持ち前を生かしてしっかり勉強は続けないといけないぞ」と、言われたが、それだけの理由では学校には行けなかった。食べることに一生懸命で誰も行く人はいなかったから。まずは、家を住めるように修理していると、

しばらくすると*新制中学というのが始まり、母が「弟には、親父の後を継がせて大工にするから、辰徳は行った方が良い」と言う。「屋久島は山ばかりだから、貴方は気転もきくし逃げ足も早いから、山の仕事をしなさい」と。それならと、学校に行き、山の勉強を始めた。新制中学では、中学校3年の代用教員として、一湊の林益人さんが社会の先生として来たこともあった。

*新制高校というのが出来て、また、そこに入ったが、勉強の内容は旧制中学と同じだった。学校の施設は、建物が一つあるだけで、グラウンドを生徒総出で造っていた。それならと、学校には行かず、家族5人を食べさせるために背負子を背負い、帰りには薪を担いで、4キロメートル先の田んぼで働いた。すると、校長先生がわざわざ家まで来て、「お父さんは、宮之浦の造林小屋で頑張って働いていると聞く、君も頑張つて、学校に来てほしい」と言われ、学校に行くことになり、それから山師になり、役場にもお世話になった。

終戦になったとはいえ、食べ物が無く苦労が続いた。

後々、屋久島で就職してから、種子島でお世話になった鎌田先生の墓参りをして、「本当にお世話になった、鎌田

先生がいたから今の自分がある」と、手を合わせた。昔の人は、やっぱり偉かった。

直接戦火を浴びるようなことは、ほとんどなかったが、あんな苦労は、もう2度としたくないと思う。

「戦時中のこと小瀬田集落空襲」

小瀬田老人クラブ

寺田 フミ (88歳)

新田 幸枝 (87歳)

新田 サチ (86歳)

藤原 スエ (84歳)

寺田リン子 (81歳)

協力…小瀬田区長

永綱喜美男

寺田 リン子(以下、リン子) 小瀬田で空襲があったのは、

昭和20年の夏。

寺田 フミ

空襲があると言って、つるべ

(以下、フミ(通称フミコ)) (井戸) に鍋やら投げ込んだ。

田んぼがあつてね、空襲の後

には、大きな穴があいていた。

スエ 20年の10月、屋久島に帰ってきた。

リン子 20年の10月ということは、戦争は終わっているよ。

スエ 終わってから帰ってきたのよ。東京大空襲の時、お

金が無くて帰って来られなかった。

リン子 船は何で帰ってきた?

スエ 船は、昔の橋丸。300トンくらいしかないのよ。

リン子 私は小学校の4年生。フミコ姉さんは88歳で、当時18歳。

サチ姉さん、その時どこにおったの?

新田 サチ(以下、サチ) 東京におったよ。終戦を東京で

迎えて、空襲にも遭ったの。

リン子 東京で何をしていたの?

サチ 病院で看護婦さんをしていた。

リン子 種子島に飛行場があつて、増田で飛行場を造りよつ

た。徴用と言って、女子も男の子がいらないから徴用さ

れて行きよるの。フミコ姉さんなんか7回も行きよる。

何回も交代交代で呼び出されていくわけ。そうしたら、

ちゃんと寄宿舎のような宿舎があつて、そこで共同生

活をして飛行場を造る作業をするわけ。

スエ そう。だいたい1カ月行つて、戻ってきたら人間が

足りなくて、また行きかたよ。

新田 幸枝(以下、幸枝) 何回やったかい?

サチ 私は2回。

フミ カライモとかを食べよつた。食べ物は何もないのよ、

米とかも一切ないから。

リン子 うん、イモも食べて、茎も食べよつた。とにかく食

べ物が無かつたね。

幸枝 茎も食べたね。

サチ 種子島には1ヶ月半くらい徴用に行つて働いて、そ

の時は仕事もできないくらい空腹で堪らなかった。そこでできた種子島の友達が、先に徴用から帰って10日間くらい毎日、漬物や唐辛子を持ってきてくれるわけ。そのことをお母さんに話したら、屋久島からトビウオを送ったりして。今でも友達だよ。

フミ 私7回。病気になった人の代わりや、兄貴は、徴用に取りられて何年も帰って来ないからね。大阪から帰って来てからもまた行きかたで、人より3回多い。徴用の時は、前もつてね、はつたい粉とか持つて行っていた。

リン子 結局あの空港は、戦争の間は出来なかったのよね。

リン子 第1回の空襲があったのは、昭和20年の3月21日。卒業式の日。

サチ 西ノ川の川沿いに穴を掘って、着物を入れてあったわけよ。卒業式にその着物を着ることになって掘り起こしていたところが、空襲が「バーン！」と、やって来た。

フミ あの時は馬が死んだのよね。

スエ うん、うちの馬も死んだ。本当に暑い日だった。

リン子 最初、イサミ爺の馬が死んで、後の空襲の時はシゲミ婆の馬が死んだ。

第1回の空襲の時には、朝、8時過ぎだったかね。まだ9時にはなっていない。

サチ 八時半くらい、卒業式。

リン子 私たちはご飯を食べていたのよね。東の方から、わつと来たから、その時はまだみんな自分の家にいた。それで慌てて、防空壕を掘っていたから、家の裏から山手に逃げて、防空壕に入ったわけ。この辺りはまだ、野原だったから、何もなかったから。

サチ 東の方にずうつと、学校か何かの切ったままの杉があつて、その杉に当たった機銃掃射の弾が1人の子の尻に当たって、大騒動したよ。

リン子 1人だけ、小学校の2年か3年生。ここを逃げて走りよつたら、お尻に当たって、けが人はその人が1人だった。

馬小屋に小型の爆弾が当たって、まあ、これは小型の爆弾だから。

サチ 家が燃えるといけないと、水をかけるのに大騒動して。私一人、雨戸を運んだり、病人を運んだり、ほとんど疲れた。

フミ 今の中央駅（旧西鹿兒島駅）で空襲に遭って、防空壕があつてみんな逃げ込んで、あの時の臭いは今でも忘れない。

種子島の徴用に行った時、防空壕があつて、奥がすごく深くて怖い思いをしたりもした。

リン子 第1回の空襲があつて、それから、みんな山の中に疎開小屋を作りだしたの。

第2回の空襲が、4月20日。その時もやっぱり東側が被害にあつた。何故かというところ、東側の家は、長屋みたいに家がつながっていたから、空から見れば工場のように見えたのではないかと、だから機銃掃射をするのではないかと思うわけ。こちら辺は、1軒1軒だけど、向こうら辺（東側）は家が全部つながっていたから。

スエ 当時は川からこつち（公民館の辺り）は、そんなに家はなかったからね。川の向こう（東側）は、屋久島の人やつたからね。

安房の橋に爆弾を落とされて、帰って来られなくて、暗くなつてから船で渡してもらつたこともあつた。

リン子 火事にならなくてよかった。

空襲だと言つて、畳をかぶつて備えたこともあつた。それから、空襲はなかったけど、まあB 29が、空の上で「ヴーヴーヴー」唸っている、2時間ぐらい編隊を組んで。音だけはして飛行機は見えないの。見えないのにみんな怖がつて。それで、2時間ぐらいしたら、都会の方に空襲に飛んで行くのだろうね。

学校も、第1回の空襲があつてから、ずっとお休み。だから、親と一緒に畑に行くでしょう、すると「あ、飛行機が来た」と言うと、もう仕事はしないのよ。土

手の陰にみんな隠れて、すると皆疲れているから寝ている。

フミ あとで笑い方だった。

スエ 隠れ方は、どこに隠れば良いかとね。

当時は、家は山の中に疎開して無いから、それでも畑はせんと食べ物が無い、だから畑には来る。

リン子 20日の空襲があつてからは、小瀬田には空襲はなかったわけ。宮之浦とか安房はあつたよ。

あの時生まれた子どもがまたかわいそうでね、向岳というのがあつた。そこに音を探知する電波探知機があると、本当か嘘か、でも誰かが言い出すと聞かない。それで子どもが泣くと分かるから、泣けばいかなんと言つて、それがかわいそうで。

スエ 女の人も村を守るのだと言つて、竹やり訓練をした。そして、夜中には風紀官幹部のおじちゃん達が回つてくる。それが、恐ろしくて、恐ろしくて、眠れなかつた。

リン子 B 29も音だけしかしないのだけど、それが怖いわけよ。私たちが、小学4年生くらいだから、一番下の方だよ、それより下の子はもう覚えてないよ。

ただ、音を聞くだけで震え上がりよつたよ。それで、一番難儀だったのは、食べ物だよ。食糧配

給が、全然無くなったわけですから、だから本当の自給自足。農業は暇さえあれば、みんなです。ほかにすることが無いわけだから、飛行機の来ないときは、畑の仕事を。作らないと無いわけだからね。学校も無いのだから、先生たちもほとんど引き上げていなかったものね。第1回の空襲が済んだら、みんな我が家を引き上げていなかった。

この前、小学校で、戦争の話をしてくださいということ、学校に行った時、子どもが、「何をおやつに食べていましたか」と、聞くわけ。何もなかったから、今は何と呼ぶのかな。私たちは、当時「いもんめ」と言っていたのだけど、味も何もないから、塩を少しかけて食べたのだけど、子どもたちに食べさせたら「おいしい」と言っていた。

もうそれが、おやつの主食みたいなもので、後は、イチゴか、タブの実。タブは美味しいよね。おかげさまで、その頃はトビウオが多かったわけよね。トビウオを乾燥させたやつを、おやつ代わりに食べていた。

自分たちが、80年生きた中で、怖い目に遭ったというのはやっぱり戦争だね。あんな思いはもう、絶対したくないね。

幸枝

本当に、戦争だけは、して欲しくないね。

山田 ツル (91歳) 安房在住



私は生まれが指宿で、学校時代は、慰問袋を作ったりいろいろしていましたね。16歳から満州の新京に行つて、麻雀・ビリヤード店の事務の手伝いをしていたの。そうしたら、父に屋久島で事業をするから帰つて来いと言われて、半年で満州から帰つてきたの。父は、屋久島で木炭の事業をして、内地の肝属あたりから9家族ぐらい連れてきて炭焼きをしていた。炭は軍の方で使うんじゃないのかな。

私は17歳で、戦争が激しくなる前に屋久島へ帰つて来られた。父は昭和16年頃、木炭の仕事を始めていたけれど、昭和17年ごろ戦争が激しくなり、木炭の煙を出せないようになつてきて、肝属あたりから連れてきていた人たちも、仕事が出来なくなつて、引き上げて行つてしまった。屋久島に残る人は残つていて、営林署の仕事で軍事材を機関車で運んでいた。その機関車も戦争が激しくなると、鉄(材)として軍に引き上げられてしまった。

営林署は、今度は馬でトロツコを引き上げるようになった。安房の林道からトロツコで運んでいて、昔は荒川から下の方は共有林だった。トロツコ道は個人の山だから、営林署で利用させてもらっていた。

私はここに残つて営林署の仕事をしてた湯泊の人と結婚した。戦時中の生活はよかつたよ。軍事材をトロツコで引上げる仕事があつたので、私らの生活はよかつたけど、他の人たちはよくなかつたよね。小杉谷には人口が多かつたから郵便とかも、トロツコで上げて、下りてくるときは、材を山のように積んで、トロツコに乗る人が6所帯ぐらいいた。1台ずつ乗つてきていたから。戦時中もトロツコで運んで終戦までしていた。生活ぶりは上の方だったよ。主人は元気で営林署で働いていたし、他の人ができない仕事をしてたから。毎日往復働いたからね。私らは、貯木場に住んでいて、馬屋もあつた。

空襲があつた時に、住宅にいて昼ご飯を食べるように準備をしていたら、サイレンが鳴つた。逃げる時「ババババ」で安房の川の方からやつてきて、慌てて、線路の上の方に造つていた防空壕まで駆け上がつて行つた。いざ終わったと思つて、帰つてきてご飯の準備をしていたらまた、サイレンが鳴つた。今度は、よちよち歩きの子どもを連れ

て走るには間に合わず、家の中で子どもを抱いて頭を下げとつたの。安房の如竹神社の方を、機銃の赤い火の玉が落ちていくのが見えていた。川の方に家があったから、頭を下げているのだけど、見えてるのよ目と鼻の先に飛行機がこれじゃいかん、避難をせんと・・・

ちようどトロッコの上の方に小屋があったからそこに疎開をして、疎開している時に安房が全部やられた。みんな山の中に疎開していたから、その時は機銃にやられて怪我をした人は、1人か2人だけ。

ケースがパチャンパチャン、海の中に火の玉みたいに落ちるのが見えていた。宮之浦から来た郵便馬車もやられて、どうにもできんで、馬はけがをしてそのままだったけど、人は防空壕に入り込んだから助かった。最初のうちはたいしたことなくて町におったけど、安房が燃えてしまったのが終戦の前の年、安房の橋も落ちてしまって、ワイヤーを伝って渡る人もいたけれど、ほとんど船で渡っていた。

その頃私らが住んでいたのは、船溜まりのところ松林があつて、そこに営林署の住宅があつて、大東の工場、あそこ一帯がみんな営林署工場に働く人の菜園になつてた。野菜を作ったり芋を作ったり、私たちも芋を作つて、馬の飼料にしないといけないから、何人か山の仕事をす

女の人たちを頼んで、トロッコで下りてきて手伝ってもらつていた。馬の飼料に草でも切ろうと思つて、鎌を2・3回パツパとしていたら、アメリカの飛行機が2機ずつ8機編隊を組んできた。爆音がしてきて、どこかにしゃがもうと思つたけど、走つて行く間もないから、畑の土手にうつ伏せになつた。背中丸見え、1回機銃掃射でやられて、沖で回つて営林署の方からまた飛んできて、飛行機の爆風が、ヒヤーと背中をなめてくれて、生きた心地がせんかつた。

そんな中でお守をしていた子どもが、連れていた子どもと、落ちていく弾の方へ行つたものだから、私は、走つて行つて、飛行機はやつてくるので、子どもを道脇に頭を突っ込ませたとけど、お守をしていた子どもの足に、「ヒュッヒュッ」と弾(赤い火の玉)が通つて、子どもはけがをした。

朝の8時なのにあたりは真つ暗、8機の飛行機が次々に2機ずつ通つて行つて、貯木場の工場を1回狙つて、また沖の方から来て、音はするけど姿は見えず、それから山の中に入つて、そこを通つて中学校の方に行つて、音が消えて行つた・・・そんなこともあつたがね。

しゃがんでいるときに、田中店のおじさんの兄さんが、

営林署でやんもち（鳥もち）製造をしていたけど、戦争が激しいからできなくなつて、材料はあつても仕事ができな
いから、そのおじさんは畑に来て、木の下にしやがんでい
たら爆弾が近くに落ちて、その破片で足がボツコリ肉ごと
取れて、「おじさんそこは弾の中やが、ここにしやがんで。」
と言つたら、「あたいは、もうやられた。」と言つて歩いて
行つた。歩けなかつたはずなのに、その時は血が垂れるの
を平気で走つて行つた。痛さを感じなかつたんやろうね。
でも、そのおじさんは、それっきり歩けんようになった。

前の日に植えたイモは、空襲で焼けて、草一本はえてい
なかつた、一面砂になつて、私らが、ここにおつたら体な
んか全然なかつたと思う。イモの茎が線香のように立つて
ただけやつた、爆風で……。8個ぐらい爆弾が落ちた。
エビの養殖があつたところに1つ、田んぼに1つ、イモを
作つていたところに1つ、中学校の下の田んぼに1つ、踏
切の上に、大きな椎の木の下に空中爆弾で、下に落ちない
で大きな木の上だけ飛んでなかつた。

疎開していた時の食べ物、営林署やつたからか*特配
があつたりしていた。夜、船が来ていたのが、昼も夜も船
が来なくなつて、買い出しに種子島に行くことになつたと。
何人か、船も雇つて、各集落から代表者が出て、種子島に

買い付けに行つた。その船は帰りしなに、米やイモを積み
込んだまま空襲にあつて、沈没してしまつた。その船にう
ちの主人も乗るはずだつたのに、山に登つていてその船が
出る時間帯に間に合わなくて、その船は、先に種子島に出
港した。主人ときよし叔父の2人は、営林署の買ひ物（食
料輸送）をしないといけないから、大和丸という小さな発
動船に乗つて、種子島に渡つた。それで、きよし叔父と主
人2人は帰つて来られた。集落で雇つた船に乗つていれば、
主人はおらん人やつたね。

そして、主人の弟が、終戦になる前に召集を受けて、家
から船に乗るちようどその朝、貯木場の船着き場に、はえ
縄船という漁船が死んだ人を引つ張つてきて、兵隊さんが、
一湊に20人ばかり上がつていと……。漁船が安房の
港に入る途中で浮いていた人に乗せて、貯木場の上のムシ
ロにその人をおろして、弟はそれを見に行き、「おいどん
もこねんなつてやが。」と言つていた。

その人を見たら、戦闘帽をかぶつて、『こばたまさお』
大分県の人やつた。ちゃんと胸にネームを付けていて、水
筒ともう一つ鞆を両方にかけてね……。みんな輸送中にや
られて、流れたその1人をこの貯木場に連れてきた。

弟は、その日の夜、何時に出たかはわからなかつたけど、

目が覚めたら橘丸はもういなかった。弟ともそれつきりや
った。案の定、南の方のフィリピン島辺で、輸送船がやら
れて。

2度と戦争はしちやいかん。しちやならんど。

自分たちも弾の中におった。

子どもを抱いて、火の玉が「ヒュッヒュッ」と入ってき
て、あたりは煙幕で真っ暗で。

火の玉だけが走ってきた——

日 高 亨 (91歳) 尾之間在住



を担当していました。

巡洋艦羽黒は昭和20年5月16日、マレーシアのペナン沖にて、イギリス艦隊との交戦により撃沈され、駆逐艦神風により乗組員304名が救助されましたが、751名の尊い犠牲を出しました。

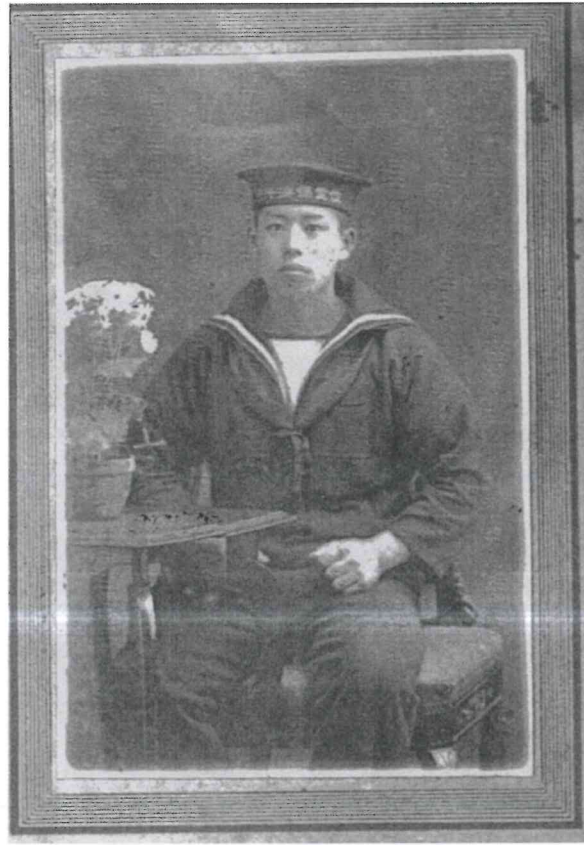
私は神風に救助された後、シンガポールに上陸し、イギリス艦隊により約3年間捕虜となり、昭和23年3月23日、屋久島に帰島しました。

※巡洋艦羽黒については、WEBにて石丸法明(元羽黒左高角砲・一等海曹)による「海の勇者の終焉^{しめつえん} ペナン沖に消えた羽黒」が掲載されています。

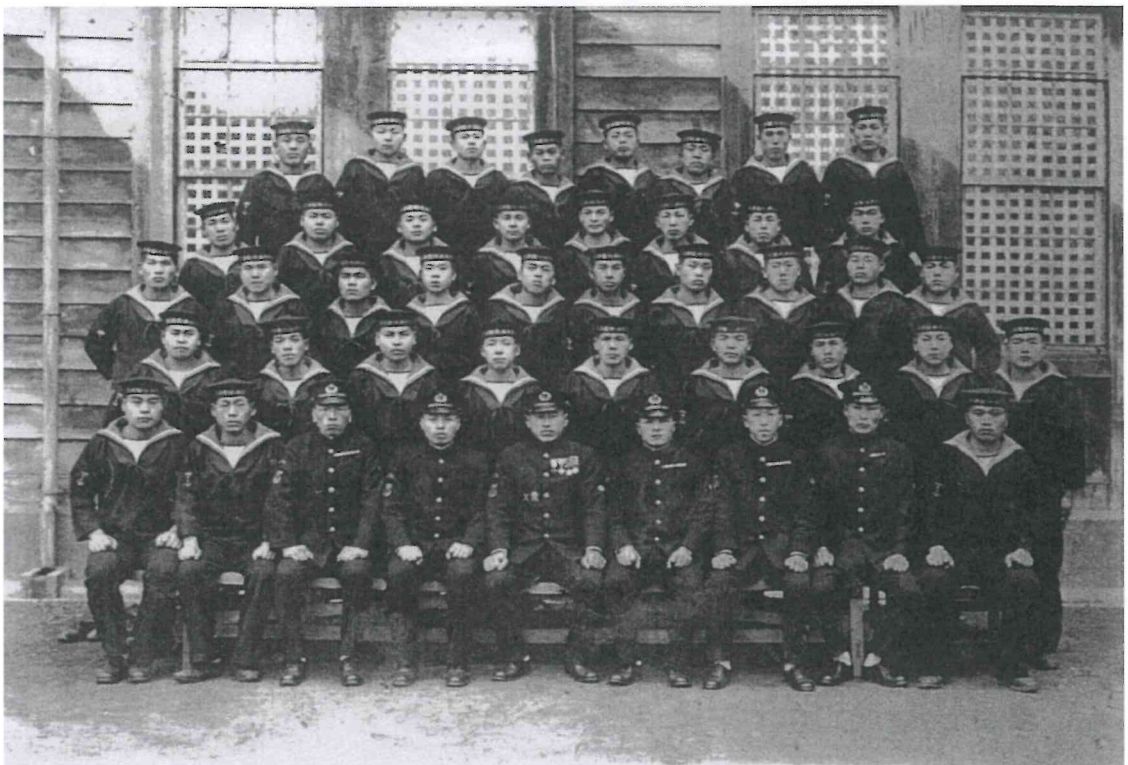
私は自分から志願し昭和16年8月中旬頃、屋久島から佐世保海軍第1隊に入隊し、海軍水雷学校と海軍潜水学校に所属していました。潜水艦に乗船することを希望していましたが、海軍の身体検査で心臓に雑音があることがわかり、潜水艦には乗船できず、巡洋艦羽黒に乗船することになりました。羽黒では魚雷整備



巡 洋 艦 羽 黒



日高 亨 16 歳



日高 亨さんは下から 3 段目の右から 3 番目



私が高等2年(15歳)の時でした。最初の空襲の時は、学校にいた子ども達は皆、帰っていた。1番上の高等2年のクラスで、校長室の大事な物を、学校の上の方にあった防空壕に全部運んで、5、6人で一緒にかたまって学校を出た。その時飛行機が飛んできて、よその防空壕に入ろうと思ったけど入れずに、学校の4年生の分教に、防空壕があったからそこに入って飛行機が通り過ぎるのを待っていた。防空壕を出て教室に行ったら、教室の中の壁に並んでいた木刀に、手榴弾が当たって、何本も折れていた。他にあんまり被害はなく、学校ではこの1部屋だけ被害にあったが、山の近くだったから、落としにくかったのだろうと思う。それから暫く空襲はなく、学校を卒業してからは、家で妹たちのお守をしていた。私は8人兄弟の3番目で、お兄さんはお母さんの連れ子で、お父さんは、漁師だったが、海に出ることはできなかった。

その頃はサツマイモを作って、洗って、薄切りにして干していたものを内地に送っていたが、船の行き来が出来なくなっていたので送れず、干したイモを納屋いっぱい積んでいた。家の防空壕は水が入ってきていたので入れられず、隣の防空壕に入れてもらっていた。

そうしたら飛行機が来て、防空壕に妹たちと入ったが、音がしてきた時に、防空壕はいっぱいになり、お父さんが入れなくなって、防空壕の入口に畳1枚をトンとかぶせたまま、お父さんは、そばの木の所に行って隠れた。その時、防空壕の入口近くに爆弾が落ちた。

家の隣の兄弟2人は、その日は朝から魚を捕ってきて、防空壕にも入らず家にいたところを、爆弾がその家に直撃し、弟さんは家の方角を向いて倒れていて、お兄さんは、家の瓦礫の下敷きになり、2人とも死んでしまった。

私たちは近所なのに、お父さんが防空壕の入口を畳で蓋をしてくれたから、爆風も入らなくて助かった。

隣の2人は、戦争に招集されなかったのに爆弾で死んでしまうなんて・・・。

あの頃の食べ物といったら、まともな食事じゃなかったから、叔母さんが、カライモにソーダを入れて、砂糖を入

れたのをきれいに作って、「ようかんを持ってきたよ。」と言って、弁当箱に入れて持ってきてくれていた。「わあ、ようかん、うれしい。」と、みんなが喜んで飛びついていた。後で聞いてみると、カライモの干したものを炊いて、ようかんみたいに作っていたそう。食べる物はカライモだけだったから、変わったものを作ってもらうのが、本当にうれしかった。

私たちは、お父さんが造った山の防空壕に避難していたが、お母さんは家において、家から食べ物を運んでくれた。お母さんは、イモを蒸かすのに火をたくと煙が出て、飛行機にわかるからと、夜が明けない暗いうちに炊いていた。お母さんがいたからこそ、ご飯を食べることができた。

お兄さんは、22歳ぐらいに赤紙が来て、戦死してしまった。お酒を飲まない人なのに、(戦争へ)行く前の日には、親戚や友だちを呼んでお祝いをした。その時に飲みすぎて、みんなが帰った後も友だちの名前をずっと呼んだりして……。

前の晩のことは、よく覚えている。友だちの名前を呼ぶお兄さんが、とても悲しかった。

私は卒業する前には、三重県に徴用で行くことになっていたけど、船も通わなくなっていたし、卒業する頃には、終戦になっていたから、行かずに済んだ。

あの頃のご飯炊きが、ほんとうに大変だった。

とにかく、平和じゃなくては。

元気でおらかな損よ。



昭和20年、終戦の年の3月に艦載機が山から低空で飛んできて爆撃がありました。その当時、私は14歳の高等1年でしたが、最初の爆撃の時は何も分からないので、防空壕に入らず布団の中に丸まっていた。爆撃により畑で亡くなった人や、家に爆弾が直撃して亡くなった人が大勢いました。その後B29の爆撃により、集落の半分以上は焼け野原になりました。

3月の最初の爆撃後、集落のほとんどの人が山に疎開していました。山の麓から1キロメートル以上の場所に、家族ごとに杉の木の下に、小屋を建てていました。その小屋に終戦後、家が建つまでの長い期間いました。当時は爆撃も怖かったです。それ以上に食料難で、食べ物はほとんどサツマイモを食べていましたが、食べられない時もあり、空腹で泣いたこともありました。

食べる物が無い時は山で食べ物を探したり、また中間集

落におばさんがおり、大きな百姓をしていたので、おばさんからもらったりしていました。

山には、疎開時の防空壕の跡が残っていると思いますが、まあとにかく悪い時期に生まれたなと思います。

私は8人兄弟で、戦争に行った兄弟はいませんが、当時は学校を卒業したら皆、動員されていました。男の人は兵隊に、女の人は軍事工場に行っていました。私の2歳上の姉が学徒動員で大阪の軍事工場に行っていたし、小学校の時に戦争に行っている親戚の叔父に手紙を書いたことを覚えています。

戦争当時、父親は消防団に入っており当時は警防団と言っていました。警防団の仕事が忙しく家のことは母親が中心となり、疎開時も家財道具一式を背負って山を登っており、今思えば、当時母親は苦労したなと思います。

学校は爆撃による被害が無く、戦後、山から学校へ通っていました。当時は子どもが多く、500人近く生徒がいきました。学校の裏に防空壕を掘り、天皇陛下の写真を避難させていたのを覚えています。

戦時中印象に残っているのは、多分特攻隊だと思われる

零戦が不時着して、その原因は分からないが機体が2つに折れていました。それと兵隊の上官の人はよそから来たが、兵隊はこの在郷軍人で、50、60人は居たね。学校の側に下水の穴があり、その穴から爆撃に飛んできた飛行機に機銃を撃っていたがなかなか落ちず、かえってやられていました。

終戦は疎開先で聞きましたが、日本は負けていないと思っております、周りからは「戦争に負けたのは嘘ですよ」と聞かされました。

あんな時代は、2度と来てほしくないね。

【寄稿の部】

「学徒出陣と私」

林 益人 (89歳) 一湊在住

私は大正14年9月9日に一湊に生まれ、今年の9月で満90歳になります。

私が3歳の時、母が病気で亡くなった為、私は小学校6年生卒業まで母方の祖父母のもとで育てられました。当時一湊はサバ漁の最盛期で、祖父はサバ釣りの15人の漁師の乗り組む発動船を2隻も持っている人で、当時は大変豊かな生活をしていました。その頃あまり持っている人のいなかった蓄音機やラジオがあり、幼い頃聞いた小唄勝太郎の流行歌「島の娘」や、寿々木米若の浪曲「佐渡情話」等の唄声を今でも覚えています。

昭和8年4月1日に私は、一湊小学校に入学しました。その頃、軍人は政治には関係してはいけないということを守られず、大きな軍靴の音が政治の中に踏み込んで来た頃で、*2・26事件後の日本陸軍のブレーキのきかない色々な政策は、小学校教育の中にも広まっていきました。私が小学校入学1年生で初めて教わった唱歌の歌詞は、「僕は軍人大好きよ、今に大きくなったなら、勲章つけて剣さげ

て、お馬に乗ってハイドードー」というもので、「お手をつないで野道を行けば」という唱歌は女の子の歌でした。

昭和11年の寒い日でした。祖父がケヤキの大きな火鉢の横で新聞を読みながら祖母に「兵隊が日本の偉い人たちを数多く殺しているが、今後日本はどんなになって行くのか」と語っていた。(確か昭和11年の2月10日くらいだったと思います)子どもの私には全く理解される筈はありませんでしたが、大学に進学して色々な本を読みあさる中で祖父が話していたのは昭和11年の2月26日の軍人が起こした2・26事件であったことが分かりました。

昭和11年、私は小学校4年生でした。陸軍大演習のため天皇陛下が鹿児島に*行幸され、屋久島からも多くの人たちが鹿児島に上がりました。当時、鹿児島に通う汽船は橘丸と八重岳丸の2隻がありました。長福丸という汽船を加えて3隻で熊毛の人達を天皇の行幸という当時の大行事に参加するため、航路を増やしたことを記憶しています。私も父が当時消防の幹部をしていたので一緒に鹿児島に上り、在郷軍人や消防団、婦人会、中等教育の生徒など、伊敷の*練兵場での*観兵式を一般市民として見学いたしました。一般市民は現在の国道3号線の場所にムシロを敷

き、「天皇陛下が通過される時は、決して顔を上げては駄目である」という指示がありました。私は子どもであったので陛下が大きなあずき色の自動車に乗って私達の前を通過し、その大きな自動車の中に天皇と正面に向かい合って座っている人がいることも見る事が出来ました。

小学校の教育は勿論軍国教育で、忘れることのできない薩摩教育健児団訓練です。尋常科4年生から高等科2年生まで「敬天愛人」と黒い字で中央に日ノ丸を描いた白い鉢巻をしめ、「我等の精神は敬天愛人で、人を相手にせず、天を相手にする」と大声を出しながら、訓練に必ず持参を義務付けられた木刀で剣道の練習をしました。

鹿児島実業高校への入学は昭和13年の4月でした。私は5年間の苦しい寮の生活に耐えました。入学式の当日、黒の網靴と*ゲートルを買うことになっていました。登校の時はその黒い靴にゲートルを巻いて登校し、上級生・先生・友人への挨拶は全て軍隊式に挙手の敬礼でした。

鹿児島実業高校の5年間は教育勅語を基本とした学校教育であり、1日でも早く実社会に出てお国のお役に立つという信念を強く教えられました。学校の軍事教練は必須

科目で、学校には数人の退役軍人の将校たちと、伊敷の陸軍45連隊から派遣された永松という現役の中尉の階級の人が配属されていました。

太平洋戦争の開戦は実業高校の4年生の時で、実際はその開戦の日から日本国民の死闘1,347日が始まるのですが、旧制中学の生徒達は、それまでの戦争での勝利の興奮で、これからつづく血の戦いのことなど思ってもいませんでした。

(大学進学と*学徒出陣)

文部省は昭和16年より職業学校(工業学校・商業学校・農業学校など)の卒業を3月から12月に繰り上げ、国の生産力の強化をはかりました。そして、ほとんどの学生が満州に就職しました。その中で大学に進学することは大変困難なことで、500人位の卒業生の中で学校長の推薦をもらえる生徒は15人位でした。私は実に運が良かったのか、大学専門学校へ受験する許可を貰えました。しかし、もし大学が不合格の場合は、満州の電信電話局へ行く条件でした。その頃までは、大学に入学すると徴兵検査が入学から3年間(学校卒業まで)延期されていて、兵役を遅らせるために大学に入学する人もたくさんいたと思います。

進学校でない私は色々なリスクもありましたが、東洋大学の入学試験に合格しました。大学合格で最も嬉しかったことの第1番は鹿児島島の旧制中学の暗い教育トンネルを抜け出したことでした。

4月の入学式で全科の入学生を前に、大倉邦彦学長の祝辞がありました。その言葉の中で今でも忘れることの出来ないのは、「本日から諸君を紳士として本学に迎える。貴方達は生徒ではなく明らかに日本の大学の学生でありますが、此の時代を考える時、大学の校門と兵営の営門は一直線上にあることを認識されたい」という教訓でした。

昭和17年から18年の半ばまでは、東京の店にはまだ甘いケーキや蜜豆等の高級品があり、日本劇場前には「撃ちて止まむ」という大きな垂れ幕が吊るされていました。

勉強し本を読み、リベラルな学生生活の中で大学の学生にも勤労令が出され、私たちは制服を教練服に着替え、東京下町江東区東砂町にある東都製鋼所に作業隊として生産の場に出て、1週間のうち3日間は工場に通い、それは私が兵隊に入隊した昭和19年12月1日までであり、その後の展開は分かりませんが昭和19年11月27日、私はこの工場の広場でリング箱の上に乗る、残っている友人に入

隊の挨拶をしていましたが、その日が、東京下町空襲の第1回の日でした。

*学徒動員の実際の理由は、「天祐を保有し」という文章に始まる「*宣戦の大詔」後、連戦連勝の軍部が敗戦を感じ、昭和18年9月22日、東條内閣は、南方戦線における人員不足を補うため大学専門学校の徴兵の猶予を停止し、これによって入営し従軍した学生は全国で3万5000人。そして、その一部は「同年12月1日入隊するべし」という命令があり、12月1日より遅れて軍隊に入る残留学生が、昭和19年10月21日、明治神宮外苑の競技場で壮行会を実施した。東京・神奈川・埼玉から77校が参加し出陣学徒と在学学徒5万人が場内をうずめ尽くしました。その日は秋雨の降る寒い日で、私はあの日の雨は、今日まで自分を慈しみ育ててくれた父母への感謝と、そして愛した人へ、国家存亡という命題のもと、自分の夢と希望を断ち切らねばならなかった苦しみ、悲しみの学徒達の涙のように思えます。徴兵延期停止はその日から5万人の学生の頭脳が日本という国から消え去った日であり、学徒出陣を期に私達学生は毎日が死と対決した青春であったと思います。

広漠とし厳寒の満州の地において、また、南方戦線の焼き尽くす様な熱風の中で、親を思い妻子を案じつつ戦線に散り、再び故郷に帰ることのなかった人達のことを思う時、徴兵検査や召集令状の永久にない社会であることを祈りたい。

「空襲と私」

池亀 一海 (86歳) 安房在住

戦後70周年の屋久島町の文集に、投稿させていただくことを光栄に存じます。

八十路を半ば過ぎると、体力は勿論、持ち合わせの少ない思考力・表現力も、より乏しくなり、そのうえ、70年前のおぼろげな記憶を辿ることになるので、不都合な点があります。ご容赦のほどお願いします。

近頃、戦争の悲惨さを体験した同じ世代の社会的有名人や、以前、身のまわりにいた先輩、知人が亡くなられるのをとても淋しく悔しく思っております。

現職(教職)にいるときから今日まで、今後の世代に我々の少年時代の悲惨さを、味あわせたくない一念で、「戦争の残酷さ」「平和の大切さ」「生命の尊さ」を、子どもたちへ伝えてきたつもりです。

さて、私の空襲の体験を述べることとなりますが、期日・時刻・被害状況など正確さを求めるため、平成19年6月17日発行の南日本新聞の「鹿児島大空襲から62年」という記事の一部を引用させていただきました。

そのころ私は、鹿児島市西田町南区に、甕島のK君、加

世田のN君、屋久島のT君らの14、15歳の少年4人で下宿していました。自分が年長だったので、責任らしいものを感じていました。

昭和20年6月17日。たまたま、下宿の叔母さんは、市内の実家へ帰宅して、自分達だけで就寝していました。午後11時過ぎ大きな爆発音がして、みんな飛び起きて外を見ると、あちこちの家から炎が上がっていました。庭の防空壕は、数日前の梅雨の水が溜まり、使用できず「武岡の山中へ行こう」と話し合い、防空頭巾を被って家を出ました。その時、黒い布を付けた大きな怪物のようなB29が、夜空一面に覆い被さって不気味な金属音を立てながら「シュッ」「シュッ」と焼夷弾を落として、黄色い光と炎が燃え上がりました。その後、きまつたように爆弾が落ちてきて、その都度地面に体を伏せました。

先を急いで走るうちに、燃える家の火照りで背中が熱くなり、火が付いた気がして、道路横の排水溝(幅3メートル)に4人とも「ドボン・ドボン」と飛び込みました。水が膝上ぐらいまであり、しばらく歩いていくと、師範学校本通りに辿り着きました。大きな石材の架け橋があつて、くぐろうとしたら、そこに、十数人しゃがんで避難していました。なんだか気強くなり、自分たちも一緒に避難させてもらうことにしました。

6月の生ぬるい水でしたが、長く浸っていると寒くなり、

B 29の波状攻撃の間を見て2人ずつ交替で、溝の石積み
を這い上がり、焼けた家の石塀に、身体を寄せて暖まりま
した。それを繰り返していると、B 29の来襲も途絶えて、
家々の火勢も弱まりました。

まもなく、桜島の方が白けて、ふと遠くに下宿家の方を
見ると、白煙の中に焼け残っていました。4人は驚いて、
一目散に駆けていきました。庭の植木はすっかり焼けて、
家の戸袋が燻っていました。すぐ消して喜び合いました。
それから4人で釜の底に残っていたご飯を4等分にして、
手のひらにのせて美味しく食べました。

いつ、また空襲を受けるかもしれないので一旦、家に帰
ることにして、荷物を片付けて、何も言わずに涙ぐみなが
ら別れていきました。自分も霧島の疎開先へ向かいました。
下宿家は、その後の空襲で焼失したと聞きました。

戦後の資料によると、鹿児島市内は、8回の空襲を受け、
市街地の93%を焼失したそうです。中でも、昭和20年6
月17日は、被害が大きくB 29・117機、爆撃1時間43
分、焼夷弾810トン、死者2,316人、焼者3,50
0人、市街地の44%が破壊されたと、記録されていまし
た。

昭和20年7月27日。家庭の都合で、私とすぐ下の妹は、
霧島から熊本県の天草(亡母の郷里)へ移転することにな

り、早朝、日豊本線に乗車し、運よく出入り口の側に席が
取られ、鹿児島本駅に11時半ごろ着きました。

その間、前の座席にいた襟に星2つを着けた優しい兵隊
さんと仲良くなりました。やがて、私の「おにぎり2つ」
と、兵隊さんの「乾パン1袋」と、「かえっこ」して、昼
ご飯を食べようとした時でした。重苦しい爆音が聞こえて、
窓から外を見ると、爆撃機がこちらへ向かっていました。
咄嗟に妹の腕をつかみ、列車から駆け降りて、ホームの防
空壕へ飛び込みました。それと同時に近くで、大きな爆発
音が生じて、その振動で「はらわた」がちぎれるような痛さ
がしました。2回目の破裂音が生じて、壕の入口に飛ばされ
たように倒れ込んで来た人がいたので、中へ引き寄せたら、
がつくりして息が途絶えているようでした。よく見ると、
先ほど「かえっこ」したばかりの兵隊さんでした。大きな
悲哀と身の危険を感じて、妹に「自分の生命は、自分で守
るのだぞ、ついて来い」と、厳しく声をかけながら壕を出
ました。

前々から聞いていた城山の大きな防空壕を目指して、懸
命に走りました。途中、多くの兵隊さんと黒の制服に白襟
の女の駅員さんたちが倒れているのが見えました。無我夢
中で這うようにして壕に着くと、おじさん、おばさんたち
が、「よかった。よかった。」と肩を叩いてくれました。妹
は、「しくしく」と泣いていました。その夜は、焼け残っ

た家の縁先で眠り、鹿児島本線、バス、船と空襲を避けながら、乗り継ぎをして、夕方遅く、叔父宅に辿り着き、すぐ眠らせてもらいました。

不安感・恐怖感・悲愴感・絶望感などが、心中で入り乱れ、その後に寄せる安堵感。「死線を越えた。」大きな体験だったと、今でも思っています。

資料によると、この日の鹿児島本駅周辺市街地の1,783戸が破壊され、死者420人、傷者620人と記録されています。

さて、私は、島外から帰り、屋久島の港、空港に降り立った時、島の空気の「美味しさ」をゆっくり味わっている「ひとり」です。

大自然の緑と水に癒され、和むことができる屋久島。生命の島と言われる所以です。

その島の川のほとりに住みついて、長生きさせて頂いていることに、日々、感謝しています。そして、将来、益々よりよい暮らしができる屋久島に、変容していくことを、祈念して止みません。

【学生部】

「平和に向けて」

中央中学校2年 眞邊 和花

みなさんは「平和」と聞くと、何を思い浮かべますか。私は「戦争」を思い浮かべます。

日本は、70年前まで、他の国々と多くの戦争をしていました。その戦争によって、多くの命が奪われ、多くのものが犠牲になりました。なかでも、原子爆弾が落とされたことによって、もたらされた被害はとてつもないものでした。

1945年8月6日に広島へ、その3日後の8月9日に長崎へ、原子爆弾が落とされました。一瞬にして、町が光におおわれ、火の海へと変わりました。

私は今年の5月、修学旅行で長崎に行つて、原爆について学びました。平和公園と原爆資料館に行き、被爆者から戦争体験も聞きました。平和公園で行つた「平和の集い」では、折鶴奉納、黙祷をして、犠牲者への冥福を祈りました。原爆資料館では、原爆が落ちた当時のものが展示されています。原爆が落ちた11時2分に止まった時計は、原爆の威力を物語っていました。放射能によって病気にかった人々の写真を見てみると、とても心が痛みました。被爆者体験講話では、被爆者の方が原爆が落ちた時の様子

を話してくれました。原爆の影響で皮膚がただれ、全身やけどをした人々が多くいたそうです。

講話をしてくださった被爆者本人も、原爆によって、幼い弟と妹を亡くしました。弟と妹を亡くした時のことを今でも鮮明に覚えていそうです。もし、私が原爆を体験して大切な人を失ったらと思うと、涙が出てきました。

修学旅行で原爆のおそろしさについて学んだおかげで、今、自分が平和でいられることがどれだけありがたいことかを知ることができました。いつも何気なく過ごしている「11時2分」も被爆者にとっては忘れられない時間なんだなと思いました。

今、日本は戦争をしていません。しかし、世界にはまだ戦争をしている国があります。その国の人々に戦争をしても、失うものしかない、誰も喜びなどしない、と教えるべきなのではないでしょうか。被爆国だからこそ、そう言うべきだと思います。私は、日本だけでなく、世界中の人々が笑顔で平和に暮らせるようになってほしいと思っています。戦争や原爆のおそろしさを忘れずに、世界中の人々が平和を目指していきたいです。

「平和とは」

金岳中学校3年 山口 かの子

世界では今、たくさん戦争が行われています。戦争だけでなく、テロ事件などでたくさん命が失われています。私は、そんな世界を平和とは思えません。世界が平和になるために、やらなければならないことがいくつかあると思います。

1つ目は、「いろいろな国や文化、考え方などを理解すること」です。戦争が起こる理由の中でも、自分たちと相手の国や地域の違いについて、理解できずに戦争になることが多いと思ったからです。

2つ目は、「昔の出来事にこだわらすぎないこと」です。たしかに、過去の出来事があるから今があります。しかし、過去の出来事にこだわらすぎると、そこに争いが起きてしまいます。だから、お互いの今を尊重していく必要があると思います。

3つ目は、「命を大切にすること」です。戦争やテロなどで命を落とした人は数えきれないほどいます。大人たちが起こした争いに巻き込まれた関係のない小さな子どもたちもたくさんいたと思います。命がどんなに大切かということをしっかりと考えなければならないと思います。

4つ目は、「どんなことでも戦争で解決しようとしてはいけないこと」です。戦争をすることで、たくさんの方が亡くなり、たくさんの方の町を壊し、食料などの生きていく上で必要なものをすべて奪ってしまいます。また、戦争は人の命だけでなく、自然を破壊します。すると自然の中に生きる動植物の命までも奪ってしまいます。だから戦争によって解決しようとするのはいけないと思います。

私は、これらのことを考えられなければ、絶対に平和は訪れないと思います。この4つのことは、国と国だけのことではなく、家族や友人の間でも大切にしなければいけないことだと思います。このことを守ることは、難しいかもしれませんが、たくさんの方が大切にしていくことが大切であると思います。

今は、地球温暖化などの環境問題によって、地球が変化していつています。その中で、自分たちのことだけを考えると、争いごとをするのは、時間の無駄だと思います。その時間を、これからどうすれば世界が平和になり、暮らしやすい世界になるのかという今の世代だけでなく、これから100年、200年先の人々のことを考えていかなければならないと思います。

これから私が高校や社会に出て行ったときに、相手のことを理解したり、様々な命を大切にしたりできるようにになりたいです。

「平和とは」

安房中学校2年 菊池 柁陽

僕は、修学旅行での被爆者体験講話を聞き、改めて平和とは何かを考えてみた。

以前は、

「平和ってなんだろう。」

と聞かれると、

「戦争がないこと。」

と簡単にしか答えられなかった。しかし、被爆者体験講話を聞き、様々なことを考えた。戦争の中で僕たちと同じ年代の子どもたちの暮らしは、働かなければならない、食べるものがなく常にひもじい、いつ空襲が起きるかかわからない、死への恐怖、周りの人が少しずついなくなっていく、明日はどうなっているのかわからない、筆舌に尽くしがたいショック、恐怖、不安にいつもつきまとわれた生活だったと思う。今の僕たちの生活とは比べものにならないほど最悪だったのだろうと想像するしかない。そんな戦時中や戦後の子どもたちの生活に対し、僕たちは、学校に通い、授業を受け、3食食べることができている。それを当たり前のこととして日々過ごしている。70年前、もっと勉強をしたかったのにできずにいた子どもたちがいたというのに、

僕は、勉強なんて嫌だと言う。みんないつもひもじい思いをしていたというのに、僕は、おいしくないなどと平気で言う。今の僕はいろいろなことに挑戦できるのに、文句を言い、ものや時間をおろそかにしている。被爆者体験講話を聞くまでは・・・。

しかし被爆者体験講話を聞いてからは、こう思えるようになった。不平不満や自分本位の考えは、何とちつぽけなのだろう。そこからは何も生まれないのだ。人のことを批判し、不満を口にするだけでは、1歩前へは進めない。だから今を大切にして感謝しながら過ごしていかなければならないと思う。

「平和って何。」

と今、尋ねられれば、

「3食を食べられておなかを満たすことができ、学校で授業を受けられて、クラスメイトと楽しく会話し、仲間たちと大好きなサッカーができ、家族と一緒に暮らせること。」と迷わず答えることができる。

今の生活は、当たり前ではなく、それは幸せなことなのだと思えることができた。これからは、もっと自分や自分の周りの人たちを大切にして、感謝しながら生きていきたい。

「いつかなくなるまで」

岳南中学校2年 山下 麻綺

人は涙を流します。あの「戦争」でどれだけの人が悲しみ、どれだけの量の涙が流れたことでしょうか。

私は5月の初め、修学旅行で長崎へ行き戦争のことについて学びました。平和公園や落下中心地、原爆資料館へ行きました。とてもきれいな町で、ここに原爆が落とされたことを想像させないような、本当にきれいな町でした。

原爆資料館では、溶けたガラス瓶や皮膚のたれた人の写真などいろいろな資料がありました。実際にその場に入ったような、そんな気持ちになりました。

その日の夜、被爆者の方が、お話をしてくださいました。その話の中では、亡くなってしまった弟さんの話や、橋の上で、焦げて死んだまま立っている馬の話などがありました。話されているとき、私の頭の中で、映像が浮かんでくるようでした。今では、ありえないようなことばかりだったので驚きを感じました。自分がもしこの時代にいたらきっと恐怖で耐えられないと思います。当時の状況を実際に聞かせていただいて、とてもいい経験になりました。

戦争にもいろいろ種類がありますが、すべてに共通するものが、「死」だと思います。今、自分がいつ死んでし

まうのか想像もつきません。でも戦争をしていたころの日本人達は、きっと今よりも「死」が身近にあったと思います。

日本は今、戦争をしていませんが、世界の国々では、今でも戦争をしています。今、自分に家族がいることや、平和な日本に生まれてきたことに感謝したいと思います。そして今度は、自分たちが次の世代に戦争に対する考えを伝えなければならぬと思います。

いつか世界から戦争がなくなるまで。

「戦後 70 年の今、訴えること」

屋久島高校 1 年 日高 真奈美

かつて日本の各地で沢山の爆弾が落とされ、多くの死傷者が出た、あの忌まわしい戦争から今年で 70 年の月日が経った。日本国内外で命を散らした日本兵。その中には、私たちと同年代の若者が戦場に駆り出されていたと言う。やりたいことを沢山残したまま死んでいった日本兵がどれだけいるだろうか。夢と希望と明日を残したまま、帰るべき場所に帰れずに死んでいった者がどれだけいただろう。

1945 年 8 月 15 日正午。昭和天皇による*玉音放送により、日本の降伏が国民に公表された。日本国民は心の底から涙を流し、その無念さに身が引き裂かれる思いだっただろう。多くの命とその未来を犠牲にした結果が「敗戦」だった。それからの日本は、連合国軍に占領され、事実上アメリカの占領下に置かれたが、どん底から這い上がり、現在に至っている。しかし、日本国憲法が公布され世の中が安定したからとはいえず、まだまだ残された課題は多い。私の住む鹿児島県、屋久島。現在の屋久島は世界自然遺産に登録され、豊かな自然に囲まれている。年間約 30 万人を超える観光客が訪れ、70 年前に戦争があったことなど微塵も感じさせない。しかし、私の住むこの屋久島も空襲に

よる被害があったのだそう。以前、私の祖父に屋久島による被害があったところがあったと聞いたことがある。私の住むこの屋久島で戦争があったことは事実なのだ。通学するバスの窓からふと空を見上げる。70 年前、B 29 の黒い飛行機が飛んでいたのだろうか。考えるだけで恐ろしい気持ちになる。一方で、平和慣れしてしまっている自分にもぞつとする。戦後 70 年が経ち、戦争を体験した世代が高齢化している。戦争というものが遠く感じられ、私たちの記憶の中で風化してしまっていないだろうか。中学校の修学旅行で行った長崎のことを思い出す。積み重なった死体の前で膝をつき、重すぎる現実を突きつけられた子どもたちの悲しみ、嘆き、叫び。今では考えられないが、過去にこのような出来事があったことを、私たち若者は知っておかなければならないと思う。2 度と悲しい戦争を起こさないために。そして同じ過ちを繰り返さないために。

「平和」とはなんだろう。毎日のように悲しい事件や出来事は絶えない。しかし、だからこそ平和の大切さを、命の尊さを訴え続けなければならない。徐々に色褪せつつある、過去の戦争、また戦争により亡くなった方々のことを忘れてはいけない。昔のことだからといって、本や写真の中に留めておらずに、私たちの声で伝え、目で訴え、全体で叫ぶことが大切である。テレビの中で映し出される「戦後 70 年」という言葉を無視せずに、この節目にしか

りと向き合い、考え伝えていかなければならない。それが、
私たち若者の「使命」なのではないだろうか。

非核平和宣言

核兵器を廃絶し、世界の恒久平和を実現することは、人類共通の願いであるとともに、屋久島町民の悲願でもある。

屋久島町民は、世界最初に核兵器に被爆した国民として、広島、長崎の惨禍を繰り返してはならず、核兵器の恐ろしき、核兵器の廃絶を全世界の人々に訴え続けていく決意である。

屋久島町は、今なお大量の非人道的核兵器が厳然と存在し、その使用が人類と地球の破滅の危機をもたらすことにかんがみ、生命の尊厳を保ち、人間らしく生活できる真の平和実現に寄与するため、日本の国是である「非核三原則」の堅持とともに核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え、「非核平和都市」となることを宣言する。

平成21年7月1日宣言

鹿児島県 屋久島町

【用語解説】

徴用・徴発・・・ 戦時中などに、国家が国民を強制的に動員して兵役以外の一般の業務につかせること。徴発は、物品、又は人を呼び出すこと。

ノモンハン事件・・・ 1939年(昭和14年)5月から9月にかけて満州国とモンゴル人民共和国の国境線をかけて発生した紛争。1930年代に断続的に発生した日ソ国境紛争の中でも最大規模の軍事衝突。

徴兵検査・・・ 一定の年齢に達した男子に対して身体検査を行い、合格した者を徴兵対象の候補者とする検査。

召集令状・・・ 在郷軍人や国民兵などを招集する命令文書。

燃夷弾・・・ 家屋物資の焼き払いや火災による人員殺傷を目的とし、中に焼夷剤が入った爆弾。

千人針・・・ 晒木綿(さらしもめん)に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って千個の結び目を作り、出征兵士の腹巻にし、戦場での幸運や兵士の生還を祈る一種のお守り。

B 29・・・ アメリカのボーイング社が設計・製造した大型爆撃機。長距離戦略爆撃を想定して設計され、第2次世界大戦末期から朝鮮戦争期のアメリカの主力戦略爆撃機として使用された。

疎開・・・ もともとは軍事用語だったが、第2次世界大戦末期には、都市に住む学童、老人、女性などを戦火から避難させ、郊外の農山村などに移動させることをいう。中でも主に学童疎開を意味することが多く、親戚宅などに避難する縁故疎開、親戚など頼るところがない場合は学校毎に、お寺などに集団で疎開する集団疎開があった。

ビルマ(国)・・・ 現ミャンマー連邦共和国。

尋常小学校・・・ 明治維新から第2次世界大戦の前までに存在した初等教育機関。当時の義務教育機関。

旧制中学・・・ 旧制中等教育学校のこと、戦前、高等教育機関への進学を主目的にした、男子のみの中等教育機関。

青年学校・・・尋常小学校を卒業した後に中等教育学校へ進学をせず勤労に従事する青少年に対して社会教育を行っていた学校。

赤紙・・・・・・・・・・在郷軍人や国民兵などを招集する命令文書。旧日本軍の招集令状には赤い紙を使用した。

背負子・・・・・・・・・・荷物をくくりつけて背負って運搬するための木材からなる運搬具。山村における薪の運用など、自動車による輸送が普及するまで主に長距離を運搬するための道具として用いられた。

グラマン戦闘機・・・アメリカの会社「グラマン」の造った戦闘機。第2次世界大戦中の日本はアメリカの情報が入らなかったため、敵機であるアメリカの戦闘機のことをグラマン戦闘機と呼んだ。

幼年学校・・・・・・・・幼年時から幹部将候補を養成するために設けられた陸軍の全寮制の教育機関。

新制中学・高校・・・第2次世界大戦後の学制改革によって1947年に新制中学校、1948年に新制高校。現在の中学校、高等学校のこと。

2・26事件・・・

1936年(昭和11年)2月26日から29日にかけて日本の陸軍皇道派の影響を受けた青年将校らが1,483名の下士官兵を率いて起こしたクーデター未遂事件。

行幸・・・・・・・・・・天皇の外出を尊敬して言う語。御幸。巡幸。

練兵所・・・・・・・・・・兵隊を訓練する場所のこと。

観兵式・・・・・・・・・・旧日本陸軍で軍隊を整列させて、天皇が観閲した儀式。

ゲートル・・・・・・・・・・脚絆(きやはん)。脛の部分にはき(又は、巻き)その保護や足の疲労軽減を目的とする布や革製の被服。

学徒出陣・・・・・・・・・・第2次世界大戦の兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する20歳以上の文科系学生を徴兵し、出征させたこと。

学徒動員・・・・・・・・・・第2次世界大戦中に、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧増産に動員されたこと。

宣戦の大詔・・・ 1941年（昭和16年）12月8日、天皇が発し

（一詔勅） た、イギリス・アメリカに対する宣戦布告のこと。

玉音放送・・・ 天皇陛下が終戦の詔書を読んだラジオ放送のこ

と。

特配・・・ 戦時中、物資の不足を調整し消費量を制限する

（特別配給） 為、軍から米をはじめとする物資が配布（配給）さ

れた。ここでいう特配は、国家公務員への配給。

あとうがき

戦後70周年の節目にあたる今年度、先の大戦の悲惨な体験を風化させないために、本町では職員の取材による戦争体験談を作成することとなりました。

この体験談は、12名の方から取材をさせていただき、また、7名の方よりご寄稿をいただきました。今回の体験談につきましては、取材を基に作成させていただきましたが、万一、不手際等ございましたら、ご容赦くださいますようお願いいたします。

なお、本文中には取材させていただいた方の心情をより正確にお伝えしたいという観点から方言等をそのまま掲載しているところがあります、ご了承ください。

今回の体験談の内容から、戦時中の体験、疎開先での暮らしなど、往時を生き抜いた方々の心からの声に、平和の大切さをあらためて認識したところではあります。

戦後生まれの世代へと人の世は移り、戦争という事実が風化しつつある今、この体験談が多くの人に伝わり、恒久平和に繋がっていかねばよいと願っておりますが、国会で可決された安全保障関連法に係る諸事を目にしますと、今回の体験談を作成しながら不安な思いにもなりました。

最後になりましたが、取材にご協力いただいた方々、

またご寄稿いただいた方々、町内の中学校・屋久島高等学校関係者の方々、誠にありがとうございました。

屋久島エレジー

波風荒き 屋久の島
通う汽船は 藪あれど

主さん乗せた あの舟は
無事に 鹿見島 着けば良い

彼方にかすむは 永良部島
寄せくる波間に 浜千鳥

泣いて 別れた あの人は
今は 何処の波の上

南の島の松影に

ほんのり 浮かんだ 紅の月

夜風に 吹かれて 只一人
想いは るかに 主のもと

屋久の浜辺に 咲いた花

心も 清き 紅椿

忘れられない あの人を

島の乙女は 今日も 待つ

皆さんにもなじみの深いこの唄は、第2次世界大戦の戦火が激しさを増す昭和19年4月、徴兵検査の為、種子島、屋久島、口永良部島の19歳、20歳の青年たちが、種子島の西之表に集められた折りのこと、永田集落出身の青年たちが、「戦場に行かなければならなかった愛しい人たちの思い、永田の乙女はかく唄うであろう」と、思い巡らせ作った唄です。

作詞・作曲 故牧 正恒

故辻 二夫

故有馬 達

計屋 謙吉

編集・発行

〒891-4207

鹿児島県熊毛郡屋久島町小瀬田469番地45

屋久島町役場 町民生活課

電話 0997-4315900 (代表)